

ハジキ品

鈴木京子

七月上旬、同じ部落のセツチャンに誘われ、初めて、ノブオさん家の赤カブの収穫に行った。私のほかに、六十代と七十代の女性が六人、六十代のノブオさん、妻のコウさんの九人で、六反歩、連続十一日間の労働だった。

ノブオさんは代々のコメ農家だが、三割減反が強制される農政に見切りをつけ、三十年前、一から畑作に挑戦することにした。

「周りからはバカだって言われたよ、まだコメの値段が高かったから。コメつくってればカネになるのに、素人が畑なんかやって……。ンでものオ、もうコメはダメだってわかったんだ、オレはのっ」

安倍政権のポストTPP農政により、建前上、減反政策はなくなったが、今年もやっぱりコメ農家は「三割減反」を続けている。「米価維持」のためにと役場と農協が一体となって監視している

からネ（それは、こんな田舎では身動きとれないほどの縛りなのだ）。その三割の減反田にも、ノブオさんは、ニンニク、ウレイ、赤カブを作っている。

赤カブに続けてすぐニンニクの収穫となったが、私だけは別の農家でのメロンの出荷作業のため抜けることになった。それを知った仕事仲間が「アンタ行つてるとこで、ハジキ買わんねが？（買えないか）」と声をかけてきた。それを聞いてさらに「おれも頼む」「おれも」と数人が寄ってきた。困った。

ハジキ、つまり規格外品、B品ということもある。私の行っているカワマタさん家でもハジキ品は出るが、出荷しないものは、売れもしない。市場出荷の他に直販や直送もしていて、形がいびつだったり、熟し過ぎて尻割れしてしまったものなどは、そういうお客さんや知り合いにお礼やあいさつ代わりとして配る。つまり、カワマタさん家にとってハジキ品は「A品を買ってくれる人」のためにある。

数年前、カワマタさん家の畑に、イトーヨーカドーの名刺を持った男が突然やってきて、「いいですね、畑もメロンもいいですね」と褒めた後、B品を売ってくれと言った。カット・フルーツにするので形は関係ない、多少尻割れしていても構わない、かえってその位が甘くていい、この畑のメロンはいつごろ出荷できますか、と一方的にしゃべった。ちょうどカワマタさんがいなくて妻のケイコさんが対応したのだが、ケイコさんはすっごく怒った。いつごろ出荷できるかは天気による



梅干し 今年は去年の半分しか実がならなかった



スイカ ゴロゴロと磨いてから箱詰めします



益虫 おかげでアブラムシに勝ちました!



赤カブ 一人一つずつパラソルさして

からわからない、アンタは尻割れしたメロンをどうやって運ぶんだ？ 店に着くまでに痛むんでろ？ そんなものを売るのか？ うちのB品はA品と同じ値段だがそれで買うか？ バイヤーは苦笑いして去った。

ケイコさんはまだ怒りがおさまらない表情で私に言った。「B品だけつくっている農家はいない」。A品、B品はあくまで出荷時の規格であって、ケイコさんは種からずっと分け隔てなく育てた。「B品がほしい」というとき、そこには「安くて当然」という期待が必ず裏にある。カワマタさんがB品を売らないのは、市場出荷できないものでカネはとれないという生産者としてのプライド、そして買い叩かせないという農民としてのプライドなのだと思う。